県指定「農夫埴輪」について

杉　崎　茂　樹

はじめに　当館には熊谷市東別府出土の男子人物埴輪が所蔵されている。笠をかぶり，鍬をかついだ農夫で，昭和57年11月30日付で県指定となった。すでに概要は報告されているが[1]，酷似する二，三の類例があるので，実測図と共に，改めて紹介しておくことにする。

形態及び製作技法上の特徴　円筒の台に半身像を作り付け，台を含めた高さは100cmと，農夫埴輪としては比較的大きなものである。台の底径は16～17cm，下から4cmのところに鈍いM字形のタガを有し，上方に左右一対の小さなスカシ孔があり，内外をタテハケメで仕上げる。胴体は円筒の台から連続的に作るが，下方に開く傘状に粘土を貼り，上衣の裾を表現し台部とは区分される。胸から肩にかけては横断面を楕円形にし，両側面部に棒状に作った腕を挿入し，粘土を充塡して接合する。胴体部分は外面をタテハケメを主に，内面はタテハケメとナナメハケメで仕上げている。腰帯（紐）が粘土紐を貼り表現されるが，右側面が剝落しており，痕跡から結び目があったものと思われる。正面には大きな刀子がこの帯から下がっている。腕は，右手が鍬（一部欠損）を肩に担ぎ，左手は胸にあてがい，指を沈線で表現する。頭部は首から顔の上方まで略同じ太さの円筒状で，頂部は丸く作り粘土を鍔状に裾に貼って，菅笠を表現している。頂部中央に剝落痕があり，飾りが付けられていたものと考えられる。顔面は円筒部に粘土を平らに貼って作る。目，口とも偏平な木ノ葉形に穿孔し，眉は，高い鼻の上部から顳顬まで，長く偏平な粘土紐で表現する。顔面の両側には太い棒状の粘土で上角髪と，その前面には耳環が付けられているが，耳の表現はされていない。

同巧の類例について　農夫埴輪は県内でも数例の出土例が知られ，関東全体では相当な数にのぼると思われる。その多くが半身像で，片手で鍬を担ぎ，他方の手を胸（又は腰）にあてがうといった定形化したポーズをとるが，とりわけ，この東別府出土品と酷似するのが，長瀞総合博物館所蔵品（写真）と京都国立博物館蔵の群馬県太田市脇屋出土品（重要美術品）である[2]。

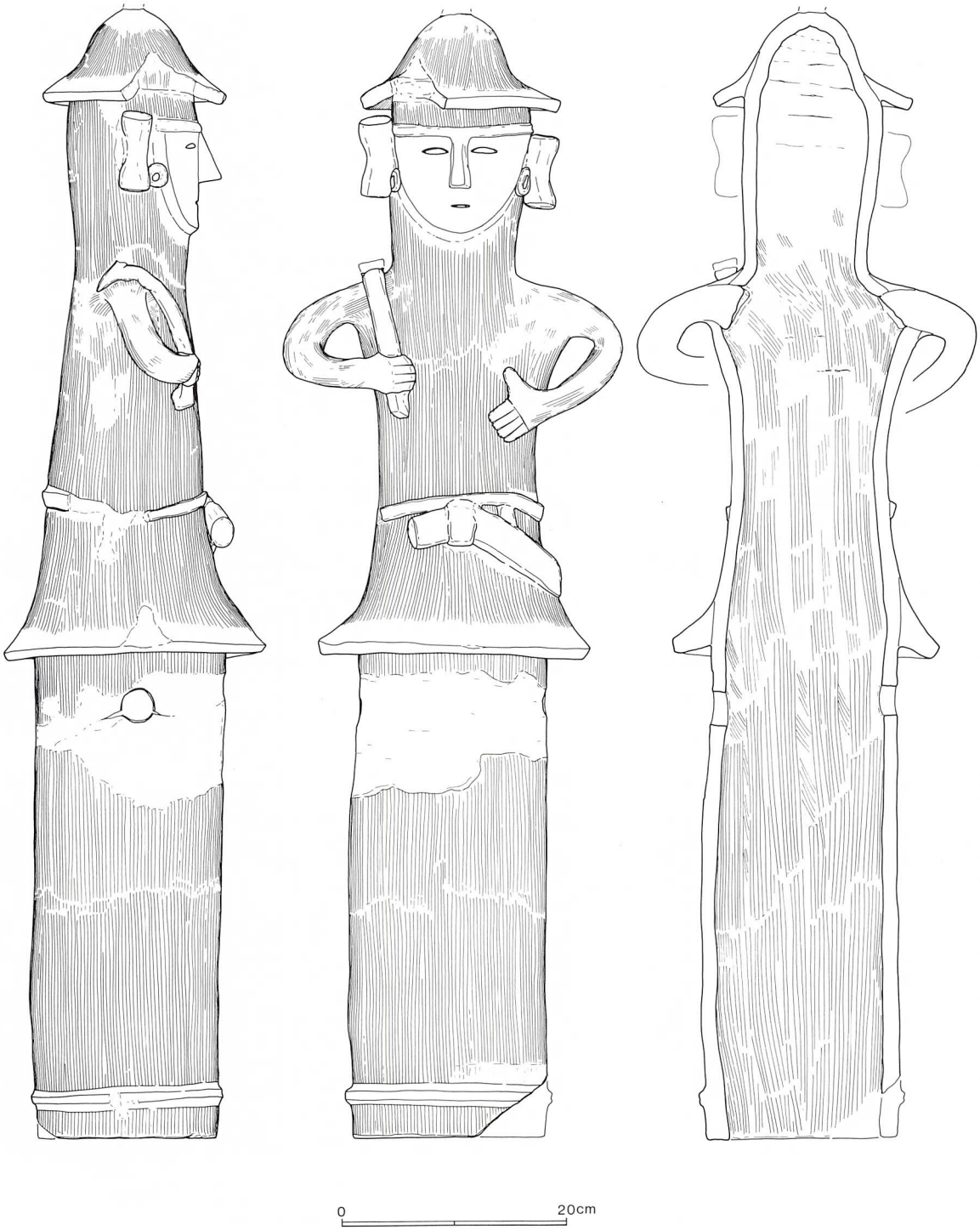
長瀞総合博物館のもの（以下「総博蔵品」）は全高93cmと，東別府出土品より一回り小型で作りはやや雑だが，円筒に上半身を作り出し，鍬を担ぐ様子や上角髪と菅笠の形態など非常によく似ている。ただし，鍬は左手で担ぎ，耳環は着装していない。出土地は遺憾ながら不明である。

次に太田市脇屋出土品だが，総博蔵品よりさらに小さく全高75cm，やはり半身像で，右手に鍬を担ぎ左手を体側にあてがうポーズや刀子，角髪，菅笠など，おおまかなところは，東別府出土品に似ている。ただ，首に玉飾りをする点は異なる。

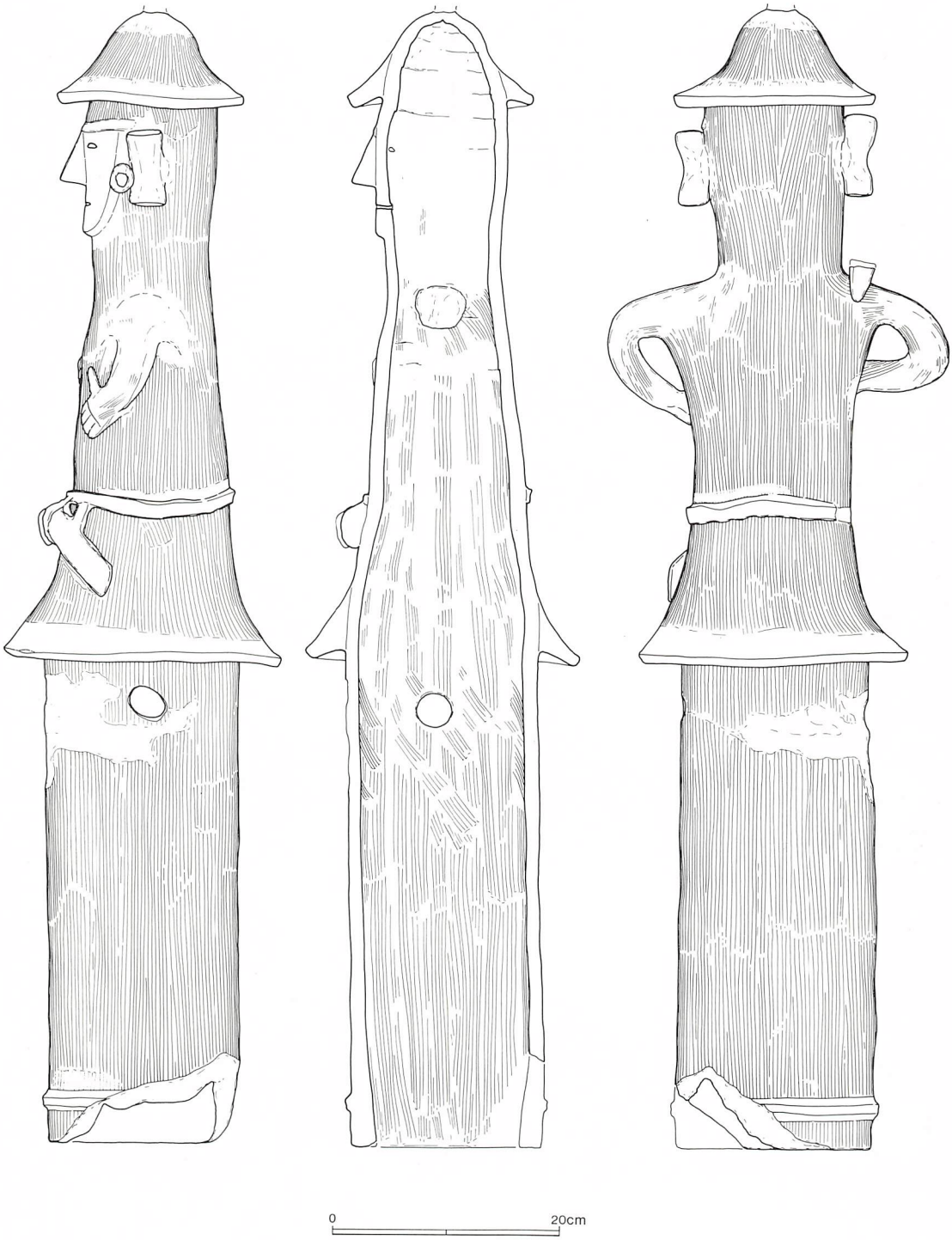
以上の三点は，同一の埴輪製作工人の作と考えるのは，表状など細かな作りに差があり無理と言わざるを得ないが，共通のモデル（それがこれら三体のいずれかである可能性もあるが）が存在するとみてよいだろう。共通のモデルを有するということであれば，三体の製作工人は，同一の集団でないにしろ，極めて近親的な工人集団の製作と認めてよいように思われる。利根川をはさみ，北武蔵と上毛野で酷似した農夫埴輪が出土している事実は，埴輪工人の動向を考えるうえで興味深い。

(1)『埼玉県指定文化財調査報告書　第14集』埼玉県教育委員会　昭和59年3月

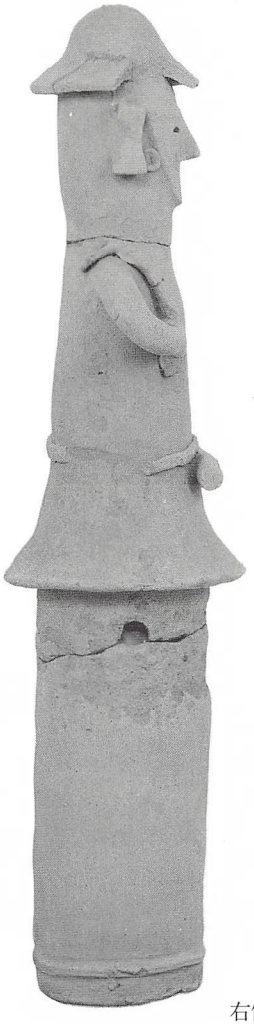
(2)　このほか　鴻巣市生出塚埴輪窯跡からも同巧と思われる農夫埴輪が出土している。（増田逸朗ほか『生出塚遺跡』同遺跡調査会　昭和58年3月）



農夫埴輪実測図(1)



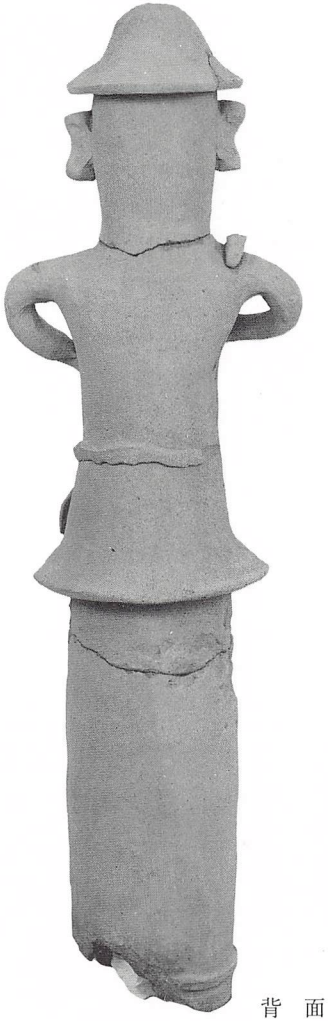
農夫埴輪実測図(2)



右側面

正　面

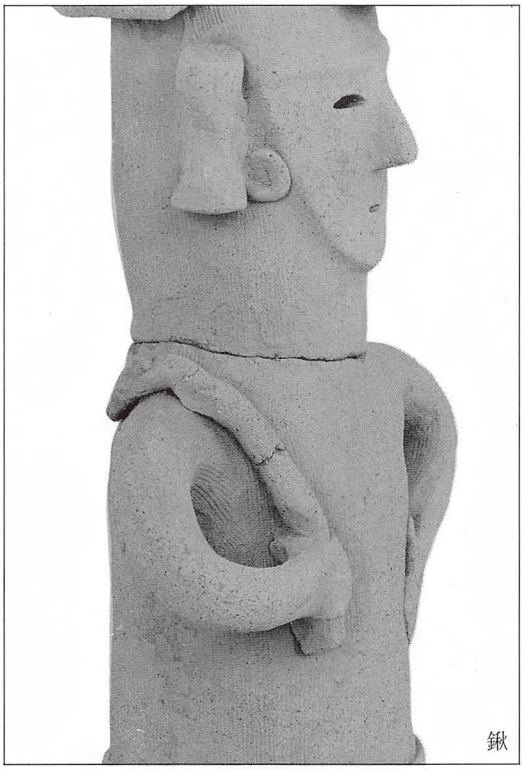
左側面



背　面

上半身

体部
（刀子）


鍬

参考：長瀞総合博物館所蔵
農夫埴輪